

田上は、電話番号案内サービスに電話をかけるため、受話器を上げた。

「はい、一〇四の工藤です」

「もしもし、神戸市内の関西国際ホテルの電話番号をお願いします」

「かしこまりました。関西国際ホテルをご案内いたします。ありがとうございます」

電話番号の案内が流れてくると、田上は素早くメモにとり、関西国際ホテルに電話した。

「はい、関西国際ホテルでございます」

「お忙しいところ恐れ入ります。宿泊料金について問い合わせをしたいのですが」

「それでは係の者におつなぎ致しますので、お待ち下さいませ」

「お待たせいたしました。フロントでございます」

「ちよつとお聞きしたいのですが、そちらのツインとダブルルームの宿泊料金を教えてくださいいただけますか？」

「はい。ツインが一万五千円、ダブルが一万九千円でどちらも朝食付でございます」

予算より少し高いが仕方がないと思つた田上は、

「そうですか。ではツインの予約をお願いします。五月九日の金曜日は取れますか？」

「申し訳ございません。あいにく、金曜日はツインが満室となっております。ダブルでしたら一部屋ご用意できますが」

田上は一瞬ためらつたが、「ではダブルで結構です」と答えた。

「ありがとうございます。では、お泊まりになる方のお名前とご連絡先をどうぞ」

「はい、豊田研究所の北野健二です。電話番号は東京〇三―五九一六―六四九二です」

「かしこまりました。では、豊田研究所の北野健二様で、五月九日のご一泊でダブルルームのご予約を承りました。私、フロントの高橋と申しますので」

「あ、私は、豊田研究所の田上と申します。それではよろしくお願いします」

受話器を置いて一息ついたとたん、田上のダイレクトインが鳴つた。

「はい、豊田研究所の田上です」

「もしもし、北野ですけど」北野は田上と同じ課の先輩である。

「お疲れさまです。今、ちよつど北野さんの携帯に電話を入れようと思つていたんですよ」

「いいタイミングだな。で、金曜日の神戸出張の件だけど、ホテルの手配は済んだ？」

「はい、たった今。でもご希望の第一ホテルは満室で取れませんでした。その近辺でいろいろ探しましたがやっぱりほとんどが満室で、結局、関西国際ホテルになりました。少し予算オーバーの一万九千円のダブルですけどいいですか？」

「ああ、構わないよ。ご苦労さん。アシスタントの手塚さんが休暇中だから、田上君に頼んでしまつて悪かつたね。今度、ご飯でもおごるよ。じゃあ、僕は今日はこのあと、田町のデザインリサーチ社を訪問して帰るから」

「わかりました。では失礼します」

電話を切つて時計を見るともう五時五分前。田上はホテルの手配騒動で中断していた提案書の作成に慌てて取りかかり、キーボードの上で指を走らせた。